

発展練習問題 24-3

<解答>

損益計算書

20X1年12月1日～12月31日

I	売上高		800,000
II	売上原価		
	1. 期首製品棚卸高	( 178,000)	Ⓐ
	2. 当期製品製造原価	<u>( 833,000)</u>	Ⓑ
	合計	( 1,011,000)	
	3. 期末製品棚卸高	<u>( 353,000)</u>	Ⓒ
	差引	( 658,000)	
	4. 原価差異	<u>( 4,000)</u>	Ⓓ ( 662,000)
	売上総利益		( 138,000)
III	販売費及び一般管理費		( 67,000)
	営業利益		( 71,000)

(以下省略)

製造原価報告書

20X1年12月1日～12月31日

I	直接材料費	( 334,000)
II	直接労務費	( 350,000)
III	直接経費	( 12,000)
IV	製造間接費	( 304,000) Ⓔ
	合計	( 1,000,000)
	製造間接費配賦差異	<u>( 4,000)</u> Ⓕ
	当期製造費用	( 996,000)
	期首仕掛品棚卸高	<u>( 19,000)</u>
	合計	( 1,015,000)
	期末仕掛品棚卸高	<u>( 182,000)</u>
	当期製品製造原価	<u><u>( 833,000)</u></u>

## 【解説】

工業を営む企業の財務諸表について損益計算書と製造原価報告書の両方の作成を求める問題である。その際に、損益計算書の「売上原価」欄は当期に販売された製品の製造原価を記入することになるが、製造原価報告書では月末仕掛品も含めて当期に発生したすべての製造原価を記入する点に注意が必要である。

基本練習問題 24-1、24-2 と同様に原価差異の処理が適切に行えるか、また製造指図書が No. 50～54 と 5 種類あるためそれぞれの原価情報を損益計算書及び製造原価報告書に適切に記入できるかがポイントになる。

### ④期首製品棚卸高

前期中に完成したものの、前期末時点では未販売（販売は当月にされている）ので、期首製品棚卸高に該当するのは製造指図書 No. 50 だけである。したがって、資料 2 より No. 50 に集計された製造原価（178,000 円）を記入する。

### ⑤当期製品製造原価

当期中に製造に着手し、当期中に完成した製造指図書 No. 51、No. 52、No. 53 について原価計算表に集計された製造原価の合計額（276,000 + 204,000 + 353,000）を記入する。

### ⑥期末製品棚卸高

当期中に完成したものの、当期中に販売されなかつた No. 53 に集計された製造原価の合計額（353,000 円）を記入する。

### ⑦損益計算書の原価差異

製造間接費予定配賦額は資料 1 の原価計算表の製造間接費欄合計額 300,000 円である。一方で、製造間接費実際発生額は資料 4 より 304,000 円だから、製造間接費配賦差異は 4,000 円の借方差異である。

製造間接費配賦差異が借方差異の場合には、損益計算書上では原価差異を加算する。

### ⑧製造間接費

製造間接費を予定配賦している場合であっても、製造原価報告書では製造間接費は実際発生額を記入するため、資料 3 より実際発生額を記入する。

### ⑨製造原価報告書の原価差異

製造間接費配賦差異が借方差異の場合には、製造原価報告書上では原価差異を減算する。